

【論文】

ジェイコブ・ヴァイナーとキリスト教の経済思想 —社会秩序における摂理の役割, ウェーバー・テーゼ批判—

Jacob Viner on Religious Thought and Economic Society: The Role of
Providence in the Social Order, Critique of Weber's Thesis

木村 雄一
KIMURA Yuichi

目次

1. はじめに
2. 社会秩序における摂理の役割
 - (1) ヴァイナーの摂理観
 - (2) 国際貿易と摂理
 - (3) 神の見えざる手と摂理
 - (4) 社会的不平等と摂理
3. キリスト教と経済思想—ウェーバー・テーゼ批判
4. おわりに

(要旨)

国際経済学・経済学史の研究者として著名なジェイコブ・ヴァイナー (1892-1970) は、経済思想の見地から資本主義社会とキリスト教の関係性を論じた『キリスト教思想と経済社会』(1978) および『社会秩序における摂理の役割』(1972) の原稿を未完成のまま遺してこの世を去った。周知のように、プロテスタンティズムの禁欲的な倫理が近代の資本主義の経済発展に強く影響を与えたというウェーバー・テーゼ (マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』1904, 1905) は、多くの研究者によってさまざまな形で受け入れられてきた。ヴァイナーは、社会史は自分の研究範囲を逸脱すると述べた上で、「理念系」を用いたウェーバー・テーゼを部分的に認めつつも、(a)ウェーバーが指摘したキリスト教と資本主義社会の関係性を論じた者には、ウェーバー以前にも多くの先達者がいること、(b)ウェーバー・テーゼの独自性はその優れた説明にあること、(c)資本主義の発展に伴って、キリスト教の信仰・教義自体が社会政策の目的と外見的・表面的に調和もしくは調整されてきたこと、を主に論じ、資本主義とキリスト教に関する経済思想研究の新たな境地を拓こうとした。本研究の目的は、ヴァイナーの摂理観、国際貿易と摂理、神の見えざる手と摂理、社会的不平等と摂理、およびヴァイナーによるウェーバー・テーゼの解釈を検討していくことで、宗教と経済の関係を論じたヴァイナーの経済思想を明らかにすることである。

1. はじめに

ジェイコブ・ヴァイナー (Jacob Viner 1892-1970) は、1892年5月3日カナダに生まれ、カナダのマギル大学を卒業した後、ハーバード大学のフランク・タウシグ教授¹⁾のもとで学位を得て、シカゴ大学およびプリンストン大学教授として国際経済学・経済学史に関する優れた研究業績を残した国際経済学者かつ経済学史家である²⁾。ヴァイナーは、アメリカ・ルーズベルト政権下の財務長官ヘンリー・モーゲンソー・ジュニア (Henry Morgenthau Jr.) の特別補佐や財務省の相談役、国務省の顧問などを務めた実践的なエコノミストの1人でもあった。1970年9月12日にヴァイナーが死去すると、彼の追悼論文が、アメリカ経済学会 (American Economic Association) をはじめとし、ライオネル・ロビンス、ポール・サミュエルソン、ウィリアム・ボーモル、フリッツ・マハループらから寄せられた (Robbins 1970, Samuelson 1972, Baumol 1972, Machlup 1972a)³⁾。なかでもマハループは、ヴァイナーの追悼論文 (Machlup 1972a) とは別に、「ヴァイナーが机に残したもの」と題するヴァイナーの遺稿に関する論文 (Machlup 1972b) も寄せ、ヴァイナーが晩年取り組んだ「キリスト教思想と経済社会」に関する遺稿を次のように紹介した。「ヴァイナーの机には2000ページ以上の未公刊資料が残されていた (中略)。1. 『キリスト教思想と経済社会』に関する本の草稿、2. 社会秩序における摂理の役割 (ジェイン講義) に関する草稿、3. 「経済学と自由」に関する5つの講義に関する草稿 (ウォバッシュ講義)、4. 王政復古からアメリカ独立革命までのイギリスの社会思想 (プリンマー講義)、5. 「イギリスの18世紀思想」の草稿、6. 諸々の講義・レポート・覚書に関する草稿や試論、7. 将来の仕事で利用しうる様々な主題に関する試論、8. 多くの研究領域の

著者および作品に関する文献に関するカードファイル、9. 書簡」(Machlup 1972b, p.353)。これらの資料は、プリンストン大学貴重書図書館 (Princeton University Library, Seeley G. Mudd Manuscript Library) に「ヴァイナー文書」⁴⁾として所収され、それらの一部はアーウィン (D. A. Irwin) の編纂によって『経済学の知性史に関する論文集』(Viner 1991) として、また『社会秩序における摂理の役割—知性史的試論』(Viner 1972) と『キリスト教思想と経済社会』(Viner 1978) は未完成ながらも編集されて研究書として、公刊された。

経済思想史の研究者にとって、1から9までのいずれの草稿も興味をひくものばかりであるが、とりわけ、1. 『キリスト教思想と経済社会』に関する本の草稿と、2. 『社会秩序における摂理の役割』(ジェイン講義) に関する草稿は、ヴァイナーの経済思想研究を行う上で重要である。というのは、国際経済学者として実務の第一線で活躍してきたヴァイナーが、経済行動と摂理 (providence) をどのように考え、両者の関係性をいかに論じたかを探究することによって、ヴァイナーの経済思想が部分的に明らかになるからである。摂理は、キリスト教などで神が人の利益を慮って導くことを意味する。また摂理は、経済学との関連で言えば、Strayer (1972) が示唆したように「世界的兄弟愛を促進するために国民間の貿易が促進することが有益であると論じる一方、社会的不平等を神の計画の一部として創造した」(Ibid., p.vii: 訳p.i) という哲学的問題の一つでもある。しかし、キリスト教の影響が強く社会的不平等が根深いヨーロッパやアメリカの資本主義経済システムを考察する上で、経済学における摂理の役割や意義および経済学と摂理の関係性を詳細に検討することは、興味深いテーマの一つである⁵⁾。

『社会秩序における摂理の役割』(Viner

1972)と『キリスト教思想と経済社会』(Viner 1978)の成立過程について触れておこう⁶⁾。ヴァイナーは、1956年にジェイムズ・ウォード・スミス (James Ward Smith) とA・リーランド・ジェイミソン (A. Leland Jamison) の編纂による『アメリカ人の生活における宗教』(プリンストン大学出版社)に、「宗教と社会」というタイトルで1万6千字程度の原稿を寄稿するように依頼された。しかし「宗教と社会」に関する論考は、字数制限のある依頼論文では収まらず、同じ出版社から『キリスト教思想と経済社会』という単著を出版する予定に変更された。1960年にプリンストン大学を定年退職した後、1961年8月までに350ページの原稿を出版社に渡す約束をした。1964年に出版社へ三章分が手渡され、ウェーバー・テーゼとプロテスタント倫理、および啓蒙運動と産業革命に関する章の執筆に集中した。しかし体調不良のため筆が思うように進まず、1969年に腹部大動脈瘤と診断され、手術ではなく薬を飲んで生き延びる選択をした。この間、アメリカ哲学協会のジェイン記念講義で『社会秩序における摂理の役割—知性史的試論』が発表され、「人間の経済学的な地位」(Viner 1968c)や「風刺文芸全盛時代としてのオーガスタン時代における風刺と経済学」(Viner 1970)が著され、『インターナショナル・エンサイクロペディア・オブ・ソーシャル・サイエンス』に「アダム・スミス」(Viner 1968a)と「重商主義」(Viner 1968b)が寄稿された⁷⁾。しかし病気の進行には勝てず、ヴァイナーは『キリスト教思想と経済社会』を完成させることなくこの世を去った。『キリスト教思想と経済社会』はいくつかの欠落部分があるとはいえ、推敲を終えていた章も存在していたので、ロビンズやポーモルら友人やヴァイナーの相続人らがその出版に尽力した。その結果、参考文献や注釈を欠いている『社会秩序における摂理の役割—知性史的試論』が1972年にまず出版さ

れ、ジャック・メリッツやドナルド・ウィンチおよびデューク大学出版社編集部によって、1978年にもう一つの遺著『キリスト教思想と経済社会』が無事公刊されたのである(Melitz, J. and Winch, D. 1978)。

こうしたキリスト教と経済学に関するヴァイナーの研究内容の概要は、Oslington (2015)、国内ではViner (1972) (1978)の翻訳書や根岸 (1980)の紹介や解説を通じて、次のように把握することができる。すなわちヴァイナーは、あくまで社会史全般は研究対象外であると断った上で、プロテスタントイズムと近代資本主義の発展について、マックス・ウェーバーが記述しているように、近代資本主義の起源を禁欲主義的なプロテスタントイズムという特定の宗教と関連づけることを必ずしも肯定することはできない、というものである。ヴァイナーは、宗教経済学として強烈な知的刺激を与えてきたウェーバー・テーゼ⁸⁾もしくはウェーバーの立論自体を、二つの遺著によって鋭く批判しているが、研究者による、キリスト教と経済思想に関するヴァイナーへの言及はほとんどなく、ヴァイナーの経済思想に関する本格的な研究は緒に就いたばかりである⁹⁾。

本研究の目的は、こうした少ない先行研究の議論を踏まえて、ヴァイナーがどのようにキリスト教と資本主義の関係性を考えていたのかを明らかにし、経済学と摂理についてどのような思想研究を展開しようとしていたのかを論じることである。ヴァイナーは「シカゴ学派」¹⁰⁾の一員とみなされ「自由主義」と結びつけて捉えられることもあるが、福祉に関心のある「柔らかな自由主義」を探究し、人々の生活がどのようにすれば豊かになるのか、ということを経済学の観点から検討していた¹¹⁾。本研究によってヴァイナーのキリスト教と資本主義に関する考え方が明らかになれば、これまで十分に検討がなされていない柔らかな自由主義者であるヴァイナーの経済

思想の一部を浮かび上がらせることができる。章立ては次の通りである。第二章では、ヴァイナーによる17～18世紀の神学者や哲学者の思想の整理を通じて、ヴァイナー自身が社会秩序における摂理の役割をどのように捉えていたのかという点を、国際貿易、神の見えざる手、社会的不平等から論じる。第三章では、ヴァイナーがウェーバー・テーゼをどのように捉えて、キリスト教と資本主義の関係をどのように解釈したかを論じる。最後の第四章では、全体の議論を踏まえて、ヴァイナーによるキリスト教と資本主義に関する見解をまとめた上で、ヴァイナーが資本主義とキリスト教に関する経済思想研究の新たな境地を開拓しようとしていたこと、ひいては部分的だがヴァイナーの経済思想を論じる。

2. 社会秩序における摂理の役割

(1) ヴァイナーの摂理観

ヴァイナーによれば、摂理とは、『創世記』第二十二章八節の「Deus proviet (主備え給わん)」に由来し(根岸1980, p.151)、神が「ほとんどの宗教に共通する、自然の外にあって自然を統治する知的存在」あるいは「超自然的存在」(Viner 1972, p.4: 訳p.5)として、世界を支配し人間に配慮を与えるという考え方である(*Ibid.*, pp.1-4: 訳pp.1-5)。思想としての摂理主義は、経済思想や政治思想といった人間の思想から成る思想と異質である¹²⁾。古代からの神学的教義は、「全体としての宇宙や地球やその有機的生命の全て、摂理との関係にかかわる宇宙の秩序」(*Ibid.*, p.5: 訳pp.6-7)であり、17～18世紀を対象とした「社会的秩序における摂理」は歴史の進路に決定的影響を及ぼしたという。たとえば、原始キリスト教は、来世で得る幸福への希望、蒼穹から受ける恵によって貧者を中心に信者を増やしたが、「新しい観測と発見によって聖書の内容と観測や論理的な推理に基づく事実と

の間に、明白な亀裂」(*Ibid.*, p.5: 訳p.7)が生じていき、決定的には16世紀の天文学におけるコペルニクス地動説による科学の発見によって、聖書の記述の信憑性と神学の権威が脅かされた。「全能なる超自然者の存在についての信仰を支えるために、神の計画の議論を発展させることが、キリスト教信仰の確立以来初めて科学思想の進歩に深い知識をもつ信者達にとって、急務となった」(*Ibid.*, pp.8-9: 訳pp.10-11)。

ヴァイナーによれば、「神学者が科学的革新に、自らを適応させたもっとも重要な方法は、新しい情報に自らの神学を『適合させる』ことであった」(*Ibid.*, p.10: 訳p.13)と述べた¹³⁾。科学と神学の関係を論じる際に、神は懐中時計製造者・柱時計製造者であるという例がよく用いられる¹⁴⁾(*Ibid.*, p.16: 訳p.19)。アイザック・ニュートンは、懐中時計・柱時計のように規則正しく有効に働く自然の秩序を維持するためには神によるたえざる周期的な介入が必要であると述べた一方、ゴットフリート・ライプニッツは、ニュートンの解釈は宇宙の最初の設計を行なった神への侮辱であり、神による奇跡の遂行であると述べた(*Ibid.*, pp.16-17: 訳p.21)。ニュートンの体系かライプニッツの体系のどちらが好ましいかの意見の一致は困難であった(*Ibid.*, p.17: 訳p.29)。厳格なキリスト教信仰者であるアウグスチヌス派のように、原罪の結果、この世の人間の生活が苦境にあるという「悲観的摂理論」が存在する一方、啓蒙主義や宗教的思想の世俗化から由来し、摂理の恵みの証拠を自然の中に求める「神学における楽観的な系譜」としての「楽観的摂理論」がある(*Ibid.*, p.29: 訳p.38)。ヴァイナーは、後者を重視し、キリスト教全体の科学への関心は、正統的カルヴァン主義による神学への固執に比べて、墮落したカルヴァン主義やカルヴァン主義への反逆と結びついていたと述べたのである(*Ibid.*, pp.23-26: 訳pp.29-33)。

(2) 国際貿易と摂理

ヴァイナーが、『国際貿易の理論』(Viner 1937), 『国際経済学』(Viner 1951), 『国際貿易と経済発展』(Viner 1953)などの国際経済学研究や国際経済秩序に関して論じてきたことは、徹頭徹尾「古典派アプローチ」による自由貿易の重要性であった¹⁵⁾。ヴァイナーは、国際経済学の一連の研究において「摂理」の思想に全く言及していないが、晩年の著作である『社会秩序における摂理の役割』(Viner 1972)と『キリスト教思想と経済社会』(Viner 1978)では、国際貿易と摂理の関係を以下の通り詳細に言及している。

贅沢品と必需品について、必需品は数量が多く安価である一方、贅沢品は数量が希少で高価である。経済学で言えば、この相違はいわゆる「水とダイヤモンドのパラドックス」であり、限界効用理論や希少性の原理によって説明される¹⁶⁾(Viner 1972 pp.31-32 :訳pp.40-42)。しかし摂理の思想によれば、生活の必需品は恵まれた自然のなかにあり、神によって贅沢品に比べて必需品が数多く与えられている¹⁷⁾。ヴァイナーによれば、この摂理の思想に言及した著述家の例は、ジョン・ロックやアダム・スミスの先生であったフランシス・ハチスンなど数多く発見できるが、とくにアルミニウス¹⁸⁾主義的なユグノーの1人であるモアーズ・アミロー¹⁹⁾こそ、摂理によって必需品にも代用品があると指摘し、人間社会における摂理の恵みの思想を深めたと述べた。ヴァイナーは、摂理によって贅沢品は希少であるが必需品は豊富であるという思想は、神学における楽観的な系譜に属する人々の著作にのみ存在する、と述べた(*Ibid.*, pp.27-29 :訳pp.35-38)。

ヴァイナーは、リバニオスという後期ストア派の異教的修辞学者が初めて、摂理と国際貿易である通商の関係について、一国は、交易を通じて繁栄を謳歌し、人間がものを交換するという性質から、文化・制度・知恵を

通じて繁栄する、と述べた(*Ibid.*, p.36: 訳p.47)。すなわち、「人間の世界的兄弟愛を促進するための手段として、摂理は人々間の貿易を促進し(中略)人々がお互いに貿易するための経済的誘因として、摂理はそれぞれの地域に異なった産物を与えた」(*Ibid.*, p.32: 訳p.42)。この思想は、ボードン、カルヴァン、14世紀のイギリスのスコラ哲学者ミドルトンのリチャード、イタリアのアルベルティ、グロティウスに影響を与えた²⁰⁾(*Ibid.*, pp.41-42: 訳p.54)。この思想から、外国貿易に制限を与えた重商主義者を悩ませる葛藤があり、穏和な重商主義と過激な重商主義の争いが存在した、と述べた(*Ibid.*, pp.42-43: 訳pp.55-56)。

「神の見えざる手」という表現で『国富論』(Smith 1776)を執筆したスミスでさえも、「通商の起源を経済的利益の合理的な追求にではなく、交易し交換しようとする半合理的な性向に求めて、多くの注解者を悩ませた」(Viner 1972, p.47: 訳p.61)とヴァイナーは述べる²¹⁾。しかしヴァイナーの理解によれば、スミスは、摂理が通商に好意的であるという思想をほめめかし、合理的もしくは功利主義的な利益の追求ばかりでなく心理的な性向に頼っている面がある(*Ibid.*, p.47: 訳p.61)が、この点は次節で詳述しよう。

ヴァイナーは、リチャード・コブデンを引きつつ、保護関税は主として豊かな地主たちの利益になり、その負担を主として都市の貧民に高価なパン代というかたちで負わせるので、穀物法廃止の努力は慈善の見地から正当化され、通商が自由であればあるほど、世界は平和になる、と述べた(*Ibid.*, pp.50-51: 訳p.65-66)。さらに摂理と、今日の国際経済理論との唯一の接点として、ヘクシャー＝オリーンの理論が述べる「相互に利益のある貿易をひきおこし、国際貿易の量と構成とを決定するものは異なった地域におけるさまざまな産物と異なった生産要素の相対的豊富さの

相違であるという考え方」は、「地域間貿易に経済的基礎を与えるのは経済資源の一様でない地位的分散であるという考え方の古代の宗教的起源」によるとヘクシャーは気づいていたと論じた (*Ibid.*, pp.51-52: 訳pp.66-67)。

ヴァイナーは、摂理が特定の国に特定の産物を配分するという思想を論じたジョン・レーは、摂理による産物の配分に政府が手を加えるべきではないが、特定の産物を関税によって保護する「幼稚産業保護論」を論じた、と指摘した。もちろんアダム・スミスも「幼稚産業保護論」を容認したが、実際そのような政策はうまくいかないことを示した。ヴァイナーによれば、摂理により特定の産物が割り当てられることが永久で不変かどうかを論じている者はおらず、むしろ経済学では、経済政策における将来の生産の比較優位の意義が論じられてきた、という (*Ibid.*, pp.53-54: 訳pp.68-70)。

(3) 神の見えざる手と摂理

ヴァイナーによれば、科学の進歩によって、17世紀後半までに倫理思想と経済思想が世俗化されていった。たとえば、ホッブスは「自然法」に従い「万人に対する万人のための闘争」を論じ、国家による強制を論じたものの、そこに神への期待を含めた、という。功利主義者のベンサムやミルとは異なる、来世の応報への恐れと希望も含めた利己主義である「神学的功利主義」²²⁾は、18世紀の英国で成功を取めた。さらに宇宙論的・神学的楽観主義と呼ばれる、前節で言及したライプニッツの『神義論』も重要な位置を占めていた²³⁾。このように多くの学説は、目的論、自働論、そして個人主義が矛盾ないように折衷され、神の意図としての摂理の上に存在した、という。

アダム・スミスは、『国富論』と並んで、『道徳感情論』という倫理学の著作を描いた。ここでも神の見えざる手が登場する。ヴァイ

ナーによれば、道徳は、心理学に近い学問領域であるという。よく知られるようにスミスは、「公平な観察者」や「共感」を掲げて、他人の意図を自分の心の中に置き換えることで、いわば非合理的な側面として、社会全体の調和を論じた。こうした道徳感情について、ヴァイナーは、「人間は摂理によって感情を与えられている。正常な環境の下では感情は誤りを犯さない。誤りに陥りがちなのは理性である」(*Ibid.*, p.78: 訳p.103)と述べ、感情そのものが神によって与えられたものと論じる。そして、「動物的本能と人間的理性の間にある心理的領域」(*Ibid.*, p.79: 訳p.104)を「共感」とし、「すべての人間に特有のものであり、あまり合理的ではない」(*Ibid.*, p.79: 訳p.104)と述べた。すなわちヴァイナーは、スミスの共感に神によって与えられたもので、摂理として解されると言う。

さらにヴァイナーは、『国富論』で論じられる、人間のみが物々交換をするという「交換性向」の人間における一層の発展、すなわち分業への発展が理性と計算の助けを得ておこなわれているのは紛れもない事実であり、それは経済的問題である、と述べつつも (*Ibid.*, p.80: 訳p.105)、「スミスは人間を交易に従事させる心理的性向をおそらくふくめたのであろう」(*Ibid.*, p.79: 訳pp.104-105)と述べた。こうした人間の感情的・心理的な設計を行なったのが神であるとし、次のように述べた。「アダム・スミスにとっては、この心理的装置のすべてが摂理によるものであり、それは神によって人間の益のために計画されたものである。そしてたとえ道徳哲学者であろうとも、あるいは道徳哲学者であればとくに、心理的装置の中に欠点を見出すことは人間として僭越であるのである」(*Ibid.*, p.81: 訳p.105)。

ヴァイナーにとってのスミスの世界は、経済的な合理的行動と摂理による非合理的行動による折衷で²⁴⁾、この偉大な折衷をみなけれ

ば、「自由放任主義」の真意を見失うと述べる。スミスにとっての「自由放任主義」は、摂理の教義や道徳原理に基礎を置いた上で、相互的正義の強制を越えて個人の経済的自由に干渉する政府への避難の一項を加えただけの考え方であり²⁵⁾、現代において用いられている「自由放任主義」の意味と全く異なる、とヴァイナーは解したのである (*Ibid.*, pp.84-85: 訳pp.111-113)。

(4) 社会的不平等と摂理

「富める者はその城に、貧しき者はその門に、神が彼らを高めもし低めもし、そしてその身分を定め賜う」 (*Ibid.*, p.86: 訳p.115)。これは、19世紀半ばにセシル・フランシス・アレグザンダー (アイルランド公会主教ウィリアム・アレグザンダー夫人) が書いて流布した賛美歌である (*Ibid.*, p.86: 訳p.116)。貧富の差としての社会的不平等の存在は、そもそも所得格差や格差社会という経済学の問題の一つであるが、思想の観点から見れば、社会的不平等と摂理は結びついている。なぜならば、摂理が社会的不平等を作り出したのかどうか、つまり神はなぜ人間に社会的不平等を与えたのかという形而上学の問題が存在するからである。ヴァイナーによれば、社会的不平等と摂理を結びつける思想は次の二点があるという。第一に社会的不平等を作り出した摂理を弁護するという点、第二に、社会的不平等が摂理の意図と合致するものとして弁護するという点、である (*Ibid.*, p.86: 訳p.115)。ヴァイナーは、上述した賛美歌は第二の点に合致し、当時のアイルランド国教会の上層部は社会的不平等を肯定するよりもむしろ、摂理を崇めるという風潮であったと述べる (*Ibid.*, p.87: 訳pp.116-117)。

社会的不平等を作り出した摂理を弁護するという第一の点について、ヴァイナーは次のように述べる。すなわち「摂理が社会的不平等を創造した (あるいは許した) ことを弁護

する基本的な、そして古くからある議論は、秩序と社会平和は人間社会にとって非常に必要なものであり、そして階級と服従とは秩序と社会平和が維持されるためには手段として不可欠である」 (*Ibid.*, p.88: 訳p.118)。さらにもう一つの局面として、「ある種の社会的不平等は宇宙全体の一般的な不平等な図案の一局面であり、もともと本質的に善きものなのであって、たんに人間およびその社会の政治的・経済的目的に役立つという機能的な意味で善いというわけではない」 (*Ibid.*, p.89: 訳p.119) と述べる。つまり、神は超自然的な価値として、人間が判断してはならない存在であると同時に、神は平等を約束せず、社会的不平等こそ美德である、と言う (*Ibid.*, p.89: 訳pp.119-120)。

こうした社会的不平等の存在を考察した第一級の研究として、ヴァイナーは、アーサー・ラブジョイの『存在の偉大な連鎖』 (*Lovejoy 1936*) のみが歴史を注意深く完全に跡づけ、この事態を説明していると評価する (*Viner 1972*, p.90: 訳pp.121)²⁶⁾。ラブジョイによれば、プラトンが形而上学の概念から説明したように、宇宙は最低のものから最高のものまで存在の全階梯と可能な種類のすべてにわたる存在の全範囲を含み、可能な限り最大限の等級、多様性、そして連続性をもつように設計されている。そのため、等級、連続性、広くみられる不平等は、豊富ないし多様性の原理を完全に適用するためには不可欠である、と考察されている (*Ibid.*, pp.90-92: 訳pp.121-123)。

こうしてヴァイナーは、アダム・スミス、ソアム・ジェニインズ²⁷⁾、サミュエル・ジョンソン²⁸⁾らの例を引き合いに出して、摂理の思想が知識人達によって貧困の存在・正当化のために用いられてきたとして、次のように述べた。アダム・スミスは、貧者と富者が存在していることを認め、より多くの人々が幸福をともに分かち合うことを説明し、ソアム・ジェニインズに至っては貧困が美德であ

るとまで述べたものの、サミュエル・ジョンソンは、貧民の苦痛が天使の快樂のための摂理の思想によって定められたというジェニインズの示唆に嫌悪し、神義論と存在の連鎖の理論に公然と疑いを投げかけた、と (*Ibid.*, pp.101-106; 訳pp.135-142)。ヴァイナーは摂理による社会的不平等論は、19世紀においてはダーウィンの進化論が出てくることで姿を消したかのように見えるが、20世紀においても摂理による不平等の考え方は時折語られていると論じた (*Ibid.*, pp.110-112; 訳pp.147-149)。こうしてヴァイナーは、知識人達が摂理と不平等に関する思想を論じた特徴を次の(i)から(iv)にまとめた。すなわち、(i)彼らの信仰と社会的政策の目的を少なくとも表面上もしくは外見的に調和させることが必要であること、(ii)教義として説いていた内容と、政策として実施していた内容との間において、論理的・修辭的な調節を行い両者の乖離がはっきりと現れないようにすること、(iii)教義が政策に合わされた例が圧倒的に多かったこと、(iv)政策に関する立案が一致していたとし敵対的・批判的ないし懐疑的な相手がはっきりしなければ、当時の知識人が諸思想の統一に努める必要がなかったこと (*Ibid.*, pp.96-97; 訳pp.128-129), である。上述の(i)~(iv)から、ヴァイナーは、摂理の思想が現実の政策に合わせて表面または外見上調和されてきたと、すなわちキリスト教の教義が現実に適応するように解釈(調節)されてきたと述べている。このヴァイナーの考えこそ、宗教と経済(例えば、上述した社会的不平等の問題)の関係を見るならば、次章で検討する、ヴァイナーによるウェーバー・テーゼの批判的検討につながる。この点で『社会秩序における摂理の役割』(Viner 1972)と『キリスト教思想と経済社会』(Viner 1978)の内容は間接的に連なっている。

3. キリスト教と経済思想—ウェーバー・テーゼ批判

ウェーバーによる1905年に書かれたテーゼ(『プロテスタンティズムと資本主義の精神』)は、ヴァイナーによれば次のように要約される²⁹⁾。企業家の利潤獲得を目的とした合理的な経済・労働組織からなる近代資本主義の始まりは、禁欲的なプロテスタンティズムに特有の宗教的な教義の支持と承認による非合理的な資本主義の精神である。なかでも、予定と召命の教義や事業の成功を、選びと救いの印とするカルヴァン主義——具体的には、勤勉による献身的であくなき富の追求・私的な消費や慈善のための支出の厳格な制限・事業の運営のための時間と注意の集中・友人との娯楽の回避・組織的な労働の搾取・人間関係における誠実性の維持——こそ、その精神に他ならない (Viner 1978, pp.151-153; 訳pp.190-193, 根岸 1980, pp.199-200)。

こうしたウェーバー・テーゼを論じるためには、人間の行動を統御する社会構造や経済制度が宗教も含めて実践を通じて人間の思想を形成したり、歴史の進路を決定するのは偉人らであったりという因果関係を考察する必要があるが、ヴァイナーは、それは社会史家の仕事であり、経済学者である自身の責務ではないとする (*Ibid.*, p.153; 訳p.192)。むしろヴァイナーは、「プロテスタンティズムがウェーバーの帰したような経済効果をもったかどうかにあるのではなくて、神学者たちの主張するプロテスタントの教義がはたしてウェーバーの叙述したものであったか」(*Ibid.*, p.153; 訳p.192)という問いを立てて、ウェーバー・テーゼを次の七つの点から詳細に検討したのである。

1) ウェーバー・テーゼに必要な天職・倫理説の説明について

ウェーバーは、カルヴィニスト、改革派、

ツヴィングリ派、バプティスト、クエーカー、徹底度の少ない禁欲的なルーテル派、敬虔主義者、メソジストを「禁欲型プロテスタンティズム」として、ウェーバー・テーゼを適用した。しかしヴァイナーによれば、ウェーバーが「天職」に関する自説を支えるための拠り所となる、禁欲的・ピューリタンの倫理説を展開したリチャード・バクスターの教義は決定的に「アルミニウス派」であったにもかかわらず³⁰⁾、ウェーバーの対象とする「禁欲型プロテスタンティズム」のリストに、ルーテル派の主力とアングリカンは除かれているが、「アルミニウス派」の取り扱いが曖昧である、と言う³¹⁾。さらにウェーバーは、「禁欲的」という言葉を「予定された人」より広いグループの人々に適用しているのだから、ウェーバー・テーゼに必要な非合理的種類の禁欲的・ピューリタンの倫理がどのようにして非予定的神学から出現しうるかの過程を説明すべきであった、と言う (*Ibid.*, p.154: 訳p.194)。

2) カルヴィニズムについて

ウェーバーは、1600年以降のカルヴィニズムを対象としているが、カルヴァンとカルヴァンの個人的教義を除外している。さらにカルヴァンに忠実に追随した全ての神学者も除外されるかどうかを明確に示していない (*Ibid.*, pp.154-155: 訳p.194)、とヴァイナーは言う。

3) カルヴィニズムと資本主義の精神

ウェーバーは、禁欲的なプロテスタンティズムが資本主義の精神に及ぼす因果的な影響として、十分な原因ではないとしても必要な原因であるとしたものの、カルヴィニズムのみが資本主義の精神に合致していた、と述べた。しかしウェーバーは、彼のテーゼを、イングランド、南フランス、オランダ、ニュー・イングランド、スコットランド系アイルランド、ドイツにおけるカルヴィニスト亡命

者、フリースラント、非ルーテル派の多数のゲルマン社会にのみ適用すべきであるとし、ジュネーブとスコットランドを省略している。ヴァイナーは、これらの適用がウェーバーによる単なる粗漏ではないとし、ウェーバー自身が、カルヴィニズムこそ資本主義の精神によく適合し促進すると思いが、必ずしもカルヴィニズムの社会だけで認められるわけではないことを理解していたはずである、と述べた (*Ibid.*, p.155: 訳pp.195-196)。

4) 決議論³²⁾

ウェーバーは、経済的な態度や振舞に及ぼすプロテスタンティズムの影響の証拠を示すために、教義に関する手引書や倫理学に関する理論的な問題に依拠せず、その代わりとして、リチャード・バクスターやフィリップ・ヤコブ・シュペナー³³⁾の具体的な倫理問題に関する実際的な教訓の文献として「プロテスタントの決議論」に依拠した。それらは、何をすることが許されているかではなく、何をなすべきかが述べられているものの、カトリックのように教義上の権威が確立しておらず、あくまで教訓に過ぎないため、それほどが信徒にどれほどの影響を与えたかどうか疑問である、とヴァイナーは言う (*Ibid.*, pp.155, pp.191-192: 訳p.196, pp.239-240)。さらにヴァイナーによれば、ウェーバーは、バクスターの『キリスト教生活指針 (Christian Directory, 1673)』以外の、重要なイギリスの決議論者であるウィリアム・パーキンス、ウィリアム・エームズ、ジュレミー・テラー、そしてロバート・サンダーソンらの決議論に全く言及せず、さらに公式の「使徒信条」や宗教会議の記録を活用していないと言う³⁴⁾。こうしてヴァイナーは、ウェーバーは詳細な歴史的証拠を示さず無根拠のままテーゼの一般化を行っているとした (*Ibid.*, pp.155-157: 訳pp.196-198)。

5) 投機的・冒険的な資本主義

ウェーバー・テーゼによれば、資本主義の指導者たちの主体的態度や目的の特殊な複合体が、資本主義の精神を生み出し促進するが、賃金労働のブルジョアの組織を含む種類のものだけが、ピューリタンの形態と合致する。しかし資本主義には多くの形態があり各国間に文化的差異が存在するため、禁欲的ではない投機的・冒険的な資本主義も存在する。ウェーバー・テーゼが、こうした資本主義の精神に当てはまるかどうかは疑問である、とヴァイナーは言う (*Ibid.*, pp.157-158: 訳pp.198-199)。

6) 「理念型」批判

ウェーバーは行動の種々のパターンを表すツールとして「理念型」を用いる。この方法は多くの研究者に高く評価されてきた手法の一つであるが、ヴァイナーは「どのように精神的錬金術を行使すればその所産が現実の歴史的状况に有効に作用し、伝達しうる立証可能な単純化となるかを理解することに比べて、いかなる点で理念型が歴史的事実もしくは現実からわざと離れるかを理解することの方が容易である」(*Ibid.*, p.158: 訳pp.199) と述べる。ヴァイナーは、(a)理念型と史的資料の解釈が混在し判別不能となっていること、(b)ウェーバーが論じるテーゼは常識的知識とされるだけで詳細な史的資料を用いていないこと、という二点から、必ずしもウェーバーの「理念型」による説明が成功しているわけではない、という (*Ibid.*, p.158: 訳pp.199-200)。

7) 予備的報告としてのテーゼ

ヴァイナーによれば、ウェーバーは、禁欲的プロテスタンティズムと近代資本主義に関する「予備的報告」としての不完全なテーゼを提示したことに過ぎない (Viner 1978, pp.158-159: 訳pp.200-201)。ヴァイナーは

「ウェーバーが考えたような『説明』の可能性を信ずる義務はないし、彼が述べたような禁欲的プロテスタントの教義が支配的であったと信ずる義務もない。あるいはまた、ブルジョア資本主義社会がウェーバーの帰したような生活パターンや傾向価値と共存するということ承認する義務もない」(*Ibid.*, p.159: 訳p.201) と述べる。

以上からヴァイナーは、ウェーバー・テーゼがもつ問題点を指摘した上で、ウェーバー・テーゼが宗教と経済の関係についてのある一面のみを論証しただけであり、実際は多様な解釈の余地がありうることを次のように述べた。「私が繰り返し述べることは、プロテスタント諸国が一般的にカトリック諸国よりも繁栄したという主張に対して、まじめに反論する著作家は、カトリックおよび非カトリックを問わず、誰もいないことである。しかしながら、カトリック教徒のうち、すべてのプロテスタント諸国は、どのカトリック国よりもずっと繁栄し勤勉であるということを否定した者もいたし、カトリックの著作家のうちには、非宗教的要因がプロテスタント諸国の経済的優越の源であるか、あるいは少なくともそれに寄与する重要な要因であると主張する者もいた」(*Ibid.*, p.182: 訳pp.229-230)。

むしろウェーバーの独創的な貢献は、ヴァイナーによれば、プロテスタンティズムに結びつけられる資本主義の精神の特殊性を説明した次の点にある。「プロテスタント経済とカトリック経済の比較を試みたウェーバー以前の文献を概観してみても得られた結論は、私が読んだ著作家のだれも、明示的に、その差異を、ウェーバーの強調したようなプロテスタント神学上の要素、すなわち、ある人の職業上の成功を救済の印として認める予定説および天職説には帰していないということである。彼らの多くは、程度の差こそあれ、ウェーバー・テーゼと衝突する説明を提示した。彼

らは一般に、原因となる要員の複数性を強調し、ウェーバーが無視ないし極小化した要因に重きを置いた。しかしウェーバー以前には、プロテスタンティズムと近代的形態の資本主義の発展との間に密接な歴史的関連があるとのほとんど普遍的な合意があった。この点でウェーバーは革新者ではなかった。彼の独創性は、プロテスタンティズムと関連のある特定の資本主義の『精神』の性質や、プロテスタント神学やこの『精神』を生み出した因果過程や、この『精神』が近代資本主義のその特殊な性格を与えるに当たって演じた役割などについて彼が行なった説明に限られていた」(Ibid., p.185: 訳p.233, 下線は引用者による)。

このようにヴァイナーは、ウェーバーこそ、資本主義の精神を構成し近代資本主義の発展に本質的な影響を与えた経済的行動様式を発生させた直接ないし間接の原因が、予定、選り、召命、救いの印としての事業の成功という特殊な教義である、と初めて独創的に論じたことを指摘し、その説明を高く評価したのである。しかしながらヴァイナーは、先述したように、必ずしもウェーバーがプロテスタンティズムと資本主義の関係の説明に成功しているわけではないと結論づけたのである。

4. おわりに

これまで論じてきた内容を要約しよう。第一に、ヴァイナーによれば、キリスト教の教義が科学の進歩によって生ずる新しい事態に適合することで、摂理と経済社会が強く結びついてきたものの、それは、正統派カルヴァン主義でなく、墮落したカルヴァン主義やカルヴァン主義への反逆としての「楽観的摂理論」に依拠していた。国際貿易の理論は、スミスやコブデン、ヘクシャーやレーの例に見るように摂理の考え方から影響を受けていることや、スミスの「神の見えざる手」の考え

方は、摂理による非合理的な思想と、経済学における合理的な行動が折衷されていることを論じた。社会的不平等や貧困問題は、知識人達によって摂理の思想から論じられてきたが、摂理の思想自体が現実の政策に合わせて調整された。ヴァイナーは、社会史的観点から経済社会に潜む宗教の問題を検討していないが、科学技術の進歩や近代資本主義の発展に伴って、プロテスタンティズムをはじめとするキリスト教の教義自体が再解釈されてきたことを示して、宗教から経済への一方的な因果関係を否定したのである。

第二に、以上のような宗教と経済の関係性を土台にして、禁欲的なプロテスタンティズムによる近代資本主義の発展に関するウェーバー・テーゼについて、プロテスタンティズム全般に関する議論、すなわち①ウェーバー・テーゼに必要な天職・倫理説、②カルヴィニズム、③カルヴィニズムと資本主義の精神、④決議論、⑤投機的・冒険的な資本主義、⑥「理念型」批判、⑦予備的報告としてのテーゼ、に曖昧な説明がいくつかあるため、ウェーバーによる立論や論証が必ずしも成功しているわけではないことを論じた。しかしながらヴァイナーは、(a)禁欲的なプロテスタンティズムによる資本主義の精神の性質、(b)その精神を生み出した過程における因果過程、(c)その精神が近代資本主義に与えた影響過程、に関するウェーバーの説明は、独創的で高く評価されると述べた。したがってヴァイナーは、ウェーバーが近代資本主義の特殊な性格をプロテスタンティズムの観点から論じた点を評価しつつも、ウェーバー・テーゼが必ずしも近代資本主義の発展過程を的確に説明したものではないと述べた。

こうしたヴァイナーの摂理と経済に関する斬新な解釈は、社会秩序における摂理の役割を明示し、さらにウェーバー・テーゼの骨格を再検討し批判的に捉えた独創的な研究の一つとして位置付けられる。Irwin (1991) が

指摘したように、ヴァイナーによる摂理をも含む社会経済思想に関する議論は、博覧強記の人と呼ばれたヨゼフ・アロイス・シュンペーターの『経済分析の歴史』(Schumpeter 1954)と並ぶほどの、深い洞察力と学識が備わっていることは疑いの余地はない³⁵⁾。ヴァイナーによるウェーバー・テーゼの扱いについては、定評あるウェーバー研究やキリスト教研究における一般的な見解と異なるため(今関 1989, 2006; 梅津 1989, 2007)、さらにヴァイナーがウェーバーの論じた社会史を研究対象外としたため、その是非については検討の余地があるものの、ウェーバー・テーゼと異なる、ヴァイナーによる宗教と経済に関する問題提起は興味深い議論を提供する。というのは、ここでのヴァイナーの検討はヨーロッパ中心ではあったが、もともとヴァイナーがアメリカの文化や社会への関心から摂理と経済の関係に関心を持った点を見るならば³⁶⁾、アメリカの経済発展が禁欲的なプロテスタントイズムに由来するのではなく、むしろ資本主義システムによる経済的要因こそが、プロテスタントや宗教に影響を与えてきたことを述べていることに等しいと推察できるからである。要するにアメリカ社会を見つめていたヴァイナーの視点によれば、宗教がアメリカ社会を大きく動かすといわれる、宗教から経済への因果関係についての見方は一方的であり、むしろ経済社会の発展こそ、制度、文化、宗教をも変容させて、その相乗効果によって社会全体が形成されていることを意味する。さらに言えば、ヴァイナーは、科学技術の進歩や社会的分業の進化による資本主義の発展によって文化や政治や宗教が左右されることを念頭に、経済こそ社会の土台であるとみなしていたと見做すこともできるのではないだろうか³⁷⁾。

このように両書が未完成であっても公刊されたことによって学界において大きな損失が妨げられた。もしこの書が完全に完成してい

たならば、ウェーバー・テーゼや宗教経済の文脈において、広く読まれたことが推測されるため、残念でならない。しかし本研究を通じて示唆に富むことは、実践・理論を通じて国際経済学者として活躍したヴァイナーが科学としての経済学(Economic Science)の世界にとどまらず、柔軟な発想を探求する源泉として、経済思想の意義を幅広く論じたことである。ヴァイナーは、『社会秩序における摂理の役割』において思想の意義を次のように述べた。「思想は、その知的状況と論理的にはまったく無関係に、遠い過去の機能的思考の残骸として、儀式的な役割を論じる伝統的弦楽器の一つとしてのみ、その効用があるのかもしれない。思想は議論や論文のためには装飾として、また詩人や劇作家のためには材料として美学的役割をもつかもかもしれない。思想は競技者や観客に技の基準を与えるためにきびしい規則をもつ知的ゲームでの、いわばテニスボールのように、競技における用具になるかもしれない。最後に、思想は鑑定家にとって掘出し物となる珍しい石や古い品物のように、すでに死に絶えていて機能を何ら果たしえなくても、無邪気な好奇心の対象物となるかもしれない。私が思想史を私自身にとっての正当な職業として認めるのは、これら数々の役割の混合の上に成立つものとしてのことである」(Viner 1972, pp.3-4: 訳p.5)。数理化・科学化が進展する現代経済学の潮流のなかで、思想研究の意義を改めて考えるためにも、ヴァイナーの遺した功績は多大であったといえよう。

(注)

- * 本稿をまとめるにあたっての特記事項は次の六点である。(1)本研究は、科学研究費補助金「ジェイコブ・ヴァイナーの経済思想——「中庸」の“リベラリスト”」(基盤研究C:15K03378)、日本大学商学部個人研究費「国際流動性の研究—ジェイコブ・ヴァイナーとライオネル・ロビンズを中心に」(2019年度)・「現代経済思想史の研究—LSE, ケンブリッジ, シカゴを中心に」(2020年度)の助成を受けている。(2)本研究は、第一次資料としてデューク大学貴重書図書館(The David M. Rubenstein Rare Book & Manuscript Library, Duke University)が所有する「ブルームフィールド文書(Bloomfield Papers)」「ボーモル文書(Baumol Papers)」と、プリンストン大学貴重書図書館(The Seeley G. Mudd Manuscript Library, Princeton University)が所有する「ヴァイナー文書(Jacob Viner Papers, 本文ではJVPと略す)」を用いている。(3)本稿で引用している邦訳は、筆者が表現を変えている箇所がある。(4)Viner(1972)は『キリスト教と経済思想』と訳されるが、本稿では『社会秩序における摂理の役割』と訳す。Viner(1978)は、直訳すれば『宗教思想と経済社会』であるが、邦訳書の通り内容を考慮して、『キリスト教思想と経済社会』と訳す。(5)本研究は、『岩波キリスト教事典』(岩波辞典, 2012), 『オックスフォードキリスト教辞典』(教文館, 2017), 『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局, 1986), 根岸夫妻訳出の『キリスト教と経済思想』(Viner 1972)に付された詳細な訳注を随時参照している。(6)二名の匿名のレフェリーから本原稿の改訂のために詳細なコメントを頂戴した。記して感謝したい。なお、本稿の誤りは全て執筆者に帰する。
- 1) タウシグは、アメリカで新古典派経済学を確立させたクラーク(J. B. Clark)やフィッシャー(I. Fisher)に継いで、イェール大学のハドリー(A. T. Hadley)やシカゴ大学のラフリン(J. L. Laughlin)とともに新古典派経済学をアメリカ

で展開した重要な国際経済学者の1人である。タウシグは、原理的に自由貿易論者であったが、幼稚産業の保護や適度な関税を容認した中庸を得た人物であり、ヴァイナーやエンジェル(J. W. Angel)を始めとし、多くの大学院生を実証研究に導いた。ヴァイナーの学位論文「1900年から1913年におけるカナダの国際収支、国際貿易理論における帰納的研究」(Viner 1924)は、イギリス古典派の分析から資本輸出反対論を批判した著作であるが(当時、短期資金を借りる立場に陥ったイギリスの国際経済状況を改善するため、ケインズらによって資本輸出反対論・金本位制の見直しが説かれていた)、国際貿易に関する帰納的論証の成果である(Viner 1936, 田中 2002)。タウシグの中庸の精神は、ヴァイナーにも引き継がれている(cf. 木村 2017, 2019)。

- 2) ヴァイナーは国際経済学の研究者である一方で、スミスやマーシャルや功利主義に関する数多くの経済思想研究(Viner 1922, 1927, 1941, 1949, 1968a, 1968b)を発表している。ヴァイナーは、国際経済学・経済理論を専門とする経済学者であったが(Irwin and Medema 2013)、経済学史にも関心を持ち、現実の経済社会を読み解くために経済思想のアプローチを高く評価した(Viner 1965)。
- 3) ヴァイナーは1930年代のLSEで客員教授として国際経済学の講義を担当したように、ロビンズにとって掛け替えのない友人であった(木村 2017, 2019)。ヴァイナーはサミュエルソンにとってシカゴ大学時代の恩師であり(木村 2015)、ハーバード大学への推薦状執筆の労をとった。ボーモルとマハループにとって、ヴァイナーはプリンストン大学の同僚で、大学院では厳しい口頭試問者であると同時に寛大な採点者であったという。プリンストン大学教授会はヴァイナーを「最も厳格な学者、深く広い心の持ち主、そして何よりも友情、温情、人間性に溢れた人物であった」と評している(Machlup

- 1972a)。
- 4) 「ヴァイナー文書」の目録については、以下のWebアドレスを参照のこと。公開されている文書であるため、比較的容易に利用することができる資料である。ただしOslington (2015) が指摘しているように、カードファイルの資料が一部紛失しているようである。<https://library.princeton.edu/special-collections/collections/jacob-viner-papers>
 - 5) 宗教と政治経済についての関係性を議論した研究は多数ある。例えば、アメリカの政治・経済・文化はプロテスタントイズムなどの宗教と複雑に結びついていると論じる堀内 (2010) や、新保守主義の立場からプロテスタントイズムを検討した橋本 (2019) がある。
 - 6) 当該成立過程については、J.メリッツとD.ウィンチの編者まえがきを参照している (Melitz, J. and Winch, D 1978)。なお、米国広告協議会 (The Advertising Council) が主催した「アメリカの経済システム」と題される五回ほど開かれた円卓会議に、ヴァイナーも参加し、アメリカ社会の宗教、道徳、文化について議論をした。その時点でのヴァイナーは、例えばインフレーションの影響や国際経済秩序の問題など、経済学者としての発言に終始しているが、この円卓会議を通じて、宗教や政治、思想に関心を寄せたと思われる (JVP/BOX130/FOLDER6)。
 - 7) これらの論考は、ウォバッシュ・カレッジでの「経済学と自由」の講演等も含めて、ダグラス・アーウィンによって紹介され (Irwin 1991)、ヴァイナーの論文集『経済学における知性史』 (Viner 1991) として出版されている。
 - 8) ウェーバー・テーゼをめぐる研究史については、梅津 (1989) を参照のこと。
 - 9) ウェーバー・テーゼをめぐる研究でヴァイナーの両文献 (Viner 1972, 1978) が扱われている研究書は根岸 (1980) を除いてほとんどない。ヴァイナーの経済学研究も欧米の経済学説史の中で紹介や研究がなされているが、ほとんど検討がされてこなかった (木村 2017, 2019)。考えられる理由としては、(1)両文献に注目する研究者が僅少であること、(2)ヴァイナー研究自体が世界的にあまり進んでいないこと、(3)両文献が未完成の著作であることから、客観的に利用されることが少ないこと、である。
 - 10) 「シカゴ学派」は、第一次世界大戦後にシカゴ大学で活躍したフランク・ナイト、ヘンリー・サイモンズ、ヴァイナーらを中心に、完全競争における均衡価格理論や貨幣理論を展開した自由主義な学派の創始者として位置付け、のちにミルトン・フリードマンやジョージ・スティグラーらによる自由競争の経済学を展開した学派のことをいう。「シカゴ学派」はフリードマンが好んだ言葉だが、ヴァイナー自身はドン・パティンキンとの書簡の中で「シカゴ学派」という呼称自体に反対している (木村 2019)。
 - 11) ロビンズが政府の市場への介入に対して適度に中庸な政策を認める自由主義を「古典的自由主義」と呼び (Sally 1998)、イギリス古典派経済学者は自由放任主義者ではなかったことを強く主張したが (Robbins 1952, 1997)、この点についてはヴァイナーもロビンズの見解とほぼ同じである (木村 2017, 2019)。ヴァイナーは、政府による市場への介入を求める柔軟な経済学者で、自らの立場を「柔らかな自由主義」と呼んだ (木村 2017, 2019)。
 - 12) ヴァイナーは世界を支配するのは神であるという摂理の思想に対して、「政治哲学者や経済学者の思想というものはほとんど独力で世界を支配してしまう」 (Viner 1972, p.1: 訳 p.1) と述べている。
 - 13) ただし各派によってその対応は異なった。たとえば、アウグスチヌス派は、科学と神学の調和から距離を取ったが、カトリックは教会を通じて聖書の本文と摂理を唯一の拠り所とせず広く新しい光を承認し、プロテスタントは、各個人の判断の権利を強調した (*Ibid.*, pp.6-7, pp.11-14: 訳pp.7-8, pp.14-17)。
 - 14) イギリスは、ベーリ、ボリンブルック、ボイル、サー・ウォルター・ローリー、大陸ではフォン

- トネル、デカルトがこの表現を用いたし、時を計る仕組みという点で言えば、ケケロまで遡ることができる (*Ibid.*, p.16: 訳pp.19-20)。
- 15) ここで言う「古典派アプローチ」とは、スミスやリカード、ミル、マーシャル、タウシグらによる古典派の国際貿易論・自由貿易論のモデルを守りつつ、現実においては柔軟に貿易政策を行う「古典的自由主義」を意味する (木村 2017)。
- 16) 周知のように限界効用価値説では、ある財の使用価値が低くても、数量が希少であれば限界効用が大きくなるため、その交換価値が高くなる。
- 17) ヴァイナーによれば、これらの思想は非キリスト教の起源をもつ。プラトンは、値段の高いものは珍奇なものだけで、水は安価であるとし、エピクロスは、生活上の必需品が入手しやすいのは恵まれた自然に感謝する必要がある、と述べた。1760年代にプーフェンドルフは、B.C.1のローマの建築家ヴィトルヴィウスが、御心によって人間の生命の安全に必要なものは豊かに与えられていると述べていたことを見出した (*Viner 1972*, pp.27-28: 訳pp.35-36)。
- 18) 「アルミニウス派 (Arminian)」は、オランダ・ライデン大学教授のアルミニウス (Jacobus Arminius) がカルヴァンの予定説に反対して神の救いは一部の人間ではなく全人類に向けてなされると唱えた、カルヴァン主義の傍流である。当初フランスとオランダで排除されたが、自由な神学の代表として1975年以降オランダで公式に認められて、近代のプロテスタント神学の形成に影響を及ぼした。
- 19) モアーズ・アミロー (Moise Amyraut, 1596-1664) は、フランスのカルヴァン派の神学者で、カルヴィニズムの厳格な予定説を和らげることを目指した。
- 20) ヴァイナーによれば、デフォーは世界的兄弟愛を促進したいという摂理にあるのではなく、人類が共存していくために一生懸命に働くように摂理によって自然資源が地域的に分散していると述べ、ヴォルテールも同じように議論を展開している (*Ibid.*, p.46: 訳p.60)。
- 21) ヴァイナーは、いわゆる「アダム・スミス問題」を取り上げ、『道徳感情論』と『国富論』の思想の一貫性を指摘し、スミスが単なる自由放任主義者でないことを早い段階で指摘した一人である (*Viner 1927*)。
- 22) ヴァイナーは、カンバランド、シャフツベリ、ラザフォースなどを例に挙げて、神の意図と全体善が整合的に論じられてきた経緯を詳述している (*Viner 1972*, pp.65-75: 訳pp.85-98)。
- 23) ヴァイナーは、詩人アレクサンダー・ポープの『人間についての随想』の次の一節を引用し、真の楽観主義 (人間は罪を犯したのだから全ての悪が有益であると考える説) かライブニッツ的な宇宙論的楽観主義 (悪の不可避性に比べて善を強調して楽観主義の世俗化を主張するが、究極的には合理化された厭世観を意味する説) かで議論があると述べる。「すべては一つの巨大な全体の部分に過ぎない。／その肉体は自然であり、その魂は神である。／すべての自然は諸君には知られぬただの技巧であり、／すべての機会は諸君の目に見えぬ指図であり、／すべての不和は理解されえぬ調和であり、／すべての悪は部分的であり、善は宇宙的である。／高慢にもかかわらず、誤れる理性にもかかわらず、／一つの真実は明白である、存在するものすべては正しい。」 (*Ibid.*, p.76: 訳pp.100-101, /は改行の意味である)。ヴァイナーは、いずれの場合も異なった知的作業によるが、社会的悪を矯正するための社会的行為に関する限り、宗教が「阿片」として容易に利用される、と指摘している (*Ibid.*, p.77: 訳p.101)。
- 24) ヴァイナーによれば、アダム・スミスは折衷主義者である。『国富論』では経済的合理性を述べ、『道徳感情論』では摂理による道徳感情論を述べる。付言すれば、ヴァイナーの解釈は、道徳の解釈を摂理との関係で論じている点で、現代のスミス研究に対しても別の重要な視点を与えている (*Viner 1968a, 1968b*)。ヴァイナーによるスミス解釈は、例えばDean (1978) の第1

- 章を参照のこと。
- 25) ヴァイナーは「アダム・スミスも（重農主義者も）彼ら自身の全思想体系の中に根本的原理として政府の役割の最小化を導入することにほんの部分的成功以上のものを得たとは私には思われない」（Viner 1972, p.85: 訳p.112）とし、スミスをはじめとするイギリス古典派経済学者たちが「単なる便法」として「自由放任主義」を扱ったのであれば、容易に当時の体系的思考に適合したが、彼らはそれを認めなかったと述べた（*Ibid.*, p.85: 訳pp.112-113）。「今日あちこちで行われている『自由放任主義』の擁護論は明らかに摂理の教義や道徳原理にその基礎を置いているのではなく、便法としての議論に依存しているのである。これはずっと簡単な作業である」（*Ibid.*, p.85: 訳p.113）と述べ、摂理や道徳原理に目を向けない教条主義的な自由放任主義者らを暗に批判した。実際、スミスは「自由放任主義」という言葉を用いていない。
- 26) ヴァイナーは18世紀のイギリスに関するラブリジョイの一般的な説明は言い過ぎであるとし、アダム・スミスは、多くの人々が幸福を共に分かち持てると述べたが、サミュエル・ジョンソンは「貧困は多く、その最終的原因についてわれわれはまったく『無知』である」（*Ibid.*, p.106: 訳p.141）とし、神義論と存在の連鎖の理論を公然と批判したことを指摘した（*Ibid.*, pp.101-106: 訳pp.135-141）。
- 27) ソアム・ジェニンス（Soame Jenyns, 1704-87）は、ケンブリッジ選挙区の下院議員で、政治・経済など多方面における著作家である。『悪の性質と起源についての自由な研究』はサミュエル・ジョンソンに酷評されたことで知られる。
- 28) サミュエル・ジョンソン（Samuel Johnson, 1709-84）は、『英語辞典』や『シェイクスピア全集』などを手がけた、機知に富んだイギリスの作家・批評家である。
- 29) ウェーバーは、我が国ではマルクスと並び社会科学の基盤となったため、膨大な研究蓄積がある。ウェーバーに関する最新の研究・論争は、没後100年の企画で出版された『現代思想12』（2020）や大塚（1989）、折原（1998）（2005）、今野（2020）、野口（2020）、橋本（2019）の整理を参照のこと。本研究に関する著者のウェーバー理解は、今野（2020）、梅津（1989）、野口（2020）、橋本（2019）（2020）を、ウェーバーとヴァイナーに関する解説は根岸（1980）を参照している。上述の研究文献によれば、ウェーバー・テーゼをめぐる批判は多数あるが、近年のウェーバーの研究でヴァイナーのキリスト教と経済学に関する研究が引かれることはほとんどないように思われるので、本稿ではヴァイナーによるウェーバー・テーゼ批判の整理・提示のみを行うことに留める。
- 30) リチャード・バクスター（Richard Baxter, 1615-91）は、イギリスでプロテスタンティズムの天職倫理を体系的に展開したピューリタンである（今関 1989, 2006; 梅津 1989, 2005）。しかしヴァイナーによれば、バクスターは厳格なカルヴィニズムに対して批判的な「アルミニウス派」に近い立場であったという（Viner 1978, p.154: 訳pp.194-195）。このヴァイナーの解釈は、バクスターが「アルミニウス派」に近い立場であるという研究（川分 2000）や、バクスター自身が特殊恩恵だけでなく普遍的恩恵の意義も認めた点から（「二重予定説」の緩和）、厳密に長老派に属さないという研究（今中 1977）に近い。しかしヴァイナーによるバクスター解釈は、定評あるバクスター研究およびキリスト教に関する辞書の記述から逸脱しているため、検討の余地がある。
- 31) ウェーバー・テーゼのなかでは、非予定説論者であるウェズリ派メソジスト、一般的パプティスト、クェーカーが除外されておらず、「ピューリタン」という用語すらの確に定義していない、とヴァイナーは指摘する（Viner 1978, p.154: 訳pp.194-195）。
- 32) ヴァイナーは『キリスト教と経済思想』の議論を補う資料として「プロテスタントの決議論」を付している（*Ibid.*, pp.191-192: 訳pp.239-

- 241)。ヴァイナーは次のように言う。「カトリックの決議論は依然として生き残り機能しているのに、プロテスタントの決議論は17世紀の終わりまでにプロテスタント世界ではいたるところで実際に死滅したという事実は、プロテスタントの決議論がカトリックの決議論の果たしたほどの明かな機能を果たさなかったという事実によって主として説明されるべきだと私は思う」(Ibid., p.192: 訳p.240)。ヴァイナーは、プロテスタンティズムには確立された教義的権威が存在しないことがむしろ逆にプロテスタントの決議論が権威的基礎を持たない理由であり、プロテスタントの決議論はカトリックの決議論に比べて流行したわけではない、と述べた (Ibid., pp.191-192: 訳pp.239-241)。
- 33) シュペナー (Philipp Jakob Spener, 1635-1705) は、ドイツのルター派教会牧師であるが、カルヴァン主義の影響を大きく受けた人物で、「敬虔主義」の指導者である。
- 34) ウェーバーは、自らの立論でバクスターの『聖徒の永遠の憩い』(1650) も用いているため、必ずしもヴァイナーの指摘が正しいとは限らない。『キリスト教生活指針』と『聖徒の永遠の憩い』の相違については、今関 (2006) を参照のこと。
- 35) ヴァイナーは、シュンペーターの『経済分析の歴史』に対して長い書評を執筆している (Viner 1954)。
- 36) アメリカとウェーバーについては今野 (2020) を参照のこと。
- 37) バロー、マックリアリー (2021) やFriedman (2021) の最新の研究によれば、ウェーバーが論じたように、宗教が経済活動に与える影響が大きいことが実証的・倫理的に論じられており、興味深い。

(参考文献)

- Baumol, W. (1972) "Jacob Viner at Princeton", *The Journal of Political Economy*, 80(1): 12-15.
- Baumol, W. and Seiler, E. (1979) "Viner, Jacob" in *International Encyclopedia of the Social Sciences: Biographical Supplement*, D.L.Sills, ed., New York: Free Press, 18: 783-787.
- Bloomfield, A. I. (1992) "On the Centenary of Jacob Viner's Birth: A Retrospective View of the Man and his work", *The Journal of Economic Literature*. XXX: 2052-2085.
- Groenewegen, P. D. (1994) "Jacob Viner and the History of Economic Thought", *Working Papers in Economics, Department of Economics, The University of Sydney*.
<https://ses.library.usyd.edu.au/handle/2123/7494>
- Dean, P. (1978) *The Evolution of Economic Ideas*. Cambridge: Cambridge University Press. (奥野正寛訳『経済思想の発展』岩波書店, 1982年).
- Friedman, B. M. (2005) *The Moral Consequences of Economic Growth*. New York: Vintage.
- (2021) *Religion and the Rise of Capitalism*. New York: Alfred A. Knopf.
- Irwin, D. (1991) "Introduction" in Jacob Viner (1991).
- Irwin, D. and Medema, S. (2013) *Jacob Viner Lectures in Economics 301*. New Jersey: Transaction Publishers.
- Lovejoy, A. O. (1936) *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (内藤健二・高山宏訳『存在の大いなる連鎖』ちくま学芸文庫, 2013年)
- Machlup, F. (1972a) "What the World Thought of Jacob Viner", *The Journal of Political Economy*, 80(1): 1-14.

- (1972b) “What was Left on Viner’s Desk”, *The Journal of Political Economy*, 80(2): 353-64.
- Melitz, J. and Winch, D. (1978) “Introduction by editors” in Viner (1978).
- Oslington, P. (2012) “Jacob Viner on Adam Smith: Development and reception of a theological reading”, *The European Journal of History of Economic Thought*. 19(2): 287-301.
- (2014) “Introduction” in Jacob Viner, *The Customs Union Issue*. Oxford: Oxford University Press.
- (2015) “Jacob Viner on Religion and intellectual history”, *ResearchGate: Paul Oslington*.
https://www.researchgate.net/publication/228974785_Jacob_Viner_on_Religion_and_Intellectual_History
- Robbins, L. C. (1952) *The Theory of Economic Policy In English Classical Political Economy*. London: Macmillan. (市川泰治郎訳『古典派経済学の経済政策理論』東洋経済新報社, 1964年).
- (1970) *Jacob Viner, 1892-1970*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- (1997) *Economic Science and Political Economy Selected Articles*, edited by Susan Howson. NY: New York University Press.
- (1998) *A History of Economic Thought: The LSE Lectures*, ed. Steven G. Medema and Warren J. Samuels. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Sally, R. (1998). *Classical Liberalism and International Economic Order: Studies in Theory and Intellectual History*. London: Routledge.
- Samuelson, P. (1972) “Jacob Viner, 1892-1970”, *The Journal of Political Economy*. 80: 5-11.
- Schumpeter, J. A. (1954) *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth Booddy Schumpeter. London: George Allen&Unwin; New York: Oxford University Press. (東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史(上・中・下)』岩波書店, 2005・2006年).
- Strayer, J. (1972) “Foreword”, in Viner (1972).
- Viner, J. (1922) “The Relation between Economics and Ethics (Discussion) ” in Viner (1958).
- (1924) *Canada’s balance of international indebtedness: 1900-1913. An inductive study in the theory of international trade*. Cambridge: Havarad University Press.
- (1927) “Adam Smith and Laissez Faire” in Viner (1958).
- (1936) “Professor Taussig’s Contribution to the theory of International Trade” in Viner (1951).
- (1937) *Studies in the theory of International Trade*, New York: Harper& Brothers. (中澤進一訳『国際貿易の理論』勁草書房, 2010年).
- (1940) “The Short view and the long in Economic Policy” in Viner (1958).
- (1941) “Marshall’s Economics, in Relation to the Man and His Times” in Viner (1958).
- (1947b) “The Role of Costs in a system of Economic Liberalism” in Viner (1958).
- (1949) “Bentham and J.S.Mill: The Utilitarian Background” in Viner (1958).
- (1951) *International economics*. Glencoe, IL: The Free Press.
- (1953) *International Trade and economic development*. Glencore, IL: The Free Press. (相原光訳『国際貿易と経済発展』巖松堂, 1959年).
- (1954) “Schumpeter’s History of Economic Analysis” in Viner (1991).
- (1955) “International trade theory and its present day relevance,” in *Economics and Public Policy*, edited by Arthur Smithies. Washington DC, Brookings Institution.
- (1958) *The Long view and the short: studies in economic theory and policy*, Glencoe, Illinois: The

- Free Press.
- (1960) “The Intellectual History of Laissez Faire” in Viner (1991).
- (1963) “The Economist in History” in Viner (1991).
- (1964) “The United States as a “welfare state”, in Edwards (1964).
- (1965) “Why study the history of economic thought?” Unpublished lecture at Harvard University. *Jacob Viner Papers* at Princeton University.
- (1968a) “Adam Smith” in Viner (1991).
- (1968b) “Mercantilist Thought” in Viner (1991).
- (1968c) “Man’s Economic Status” in Viner (1991).
- (1970) “Satire and Economics in the Augustan Age of Satire” in Viner (1991).
- (1972) *The Role of providence in the social order: an essay in intellectual history*. The Philadelphia: American Philosophical Society. (根岸隆・愛子訳『キリスト教と経済思想』有斐閣, 1980年).
- (1978) *Religious Thought and Economic Society: Four chapters of an unfinished work*. Edited by Jacques Melitz and Donald Winch. Durham: Duke University Press. (久保芳和・橋本比登志・篠原久・井上琢智訳『キリスト教思想と経済社会』嵯峨野書院, 1981年).
- (1991) *Essays on the Intellectual History of Economics*. Edited by Douglas Irwin. Princeton: Princeton University Press.
- Winch, D. (1981) “Jacob Viner”, *American Scholar*, 50: 519-525.
- (1983) “Jacob Viner as Intellectual Historian”, *Research in the History of Economic Thought and Methodology*, 1: 1-17.
- 今関恒夫 (1989) 『ピューリタニズムと近代市民社会: リチャード・バクスター研究』みすず書房.
- (2006) 『バクスターとピューリタニズム: 17世紀イングランドの社会と思想』ミネルヴァ書房.
- 今中比呂志 (1977) 『イギリス革命政治思想史研究: R.バクスターとA.シドニーを中心として』御茶の水書房.
- 今野元 (2020) 『マックス・ウェーバー—主体的人間の悲喜劇』岩波新書.
- マックス・ウェーバー (1989) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(大塚久雄訳) 岩波文庫.
- (1998) 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』(富永祐治・立野保男訳, 折原浩補訳) 岩波文庫.
- 梅津順一 (1989) 『近代経済人の宗教的根源—ヴェーバー, バクスター, スミス』みすず書房.
- (2005) 『ピューリタン牧師バクスター: 教会改革と社会形成』教文館.
- 大塚久雄 (1989) 「訳者解説」マックス・ウェーバー (1989) 所収.
- 折原浩 (1998) 「解説」マックス・ウェーバー (1998) 所収.
- (2005) 『ヴェーバー学の未来—「倫理」論文の読解から歴史・社会科学の方法会得へ』未来社.
- エルンスト・カッシーラー (2003) 『啓蒙主義の哲学 (上・下)』(中野好之訳) ちくま学芸文庫.
- (1998) 『人間本性考』(鈴木信雄・市岡義章・佐々木光俊訳) 名古屋大学出版会.
- 川分圭子 (2000) 「旧非国教徒の時代—ある貿易商一族の信仰」『京都府立大学学術報告 (人文社会)』52: 13-38.
- 木村雄一 (2009) 『LSE 物語—現代イギリス経済学者たちの熱き戦い』NTT 出版.
- (2015) 「J. ヴァイナーと費用曲線」『埼玉大学紀要教育学部』64(1): 117-132.
- (2017) 「J. ヴァイナーと国際貿易—自由貿易, 関税同盟, 古典的自由主義」『商学集志 (日本大学商学部)』87(2・3): 19-50.
- (2019) 「ジェイコブ・ヴァイナーとニューディール」『商学集志 (日本大学商学部)』89(3): 15-34.

- 田中敏弘 (2002) 『アメリカの経済思想—建国期から現代まで』 名古屋大学出版会.
根岸隆 (1980) 「訳者解説」 J. Viner (1972) (根岸隆・愛子訳 『キリスト教と経済思想』 有斐閣 1980年所収).
野口雅弘 (2020) 『マックス・ウェーバー—近代と格闘した思想家』 中公新書.
橋本努 (2019) 『解説 ウェーバー 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』』 講談社.
—— (2020) 「資本主義の精神とは何か」 『現代思想12 マックス・ウェーバー—没後100年』 48 (17) (青土社).
ロバート・J・バロー, レイチェル・M・マックリアリー (2021) 『宗教の経済学—信仰は経済を発展させるのか』
(田中健彦訳・大垣昌夫解説) 慶応義塾大学出版会.
保坂俊司 (2006) 『宗教の経済思想』 光文社新書.
堀内一史 (2010) 『アメリカと宗教—保守化と政治化のゆくえ』 中公新書.
山之内靖 (1997) 『マックス・ヴェーバー入門』 岩波新書.

(Abstract)

Before his death, Jacob Viner (1892-1970) a distinguished economist in international economics and the history of economic thought, left two unfinished works on his desk. These works, which discuss the relationship between capitalist society and Christianity from the perspective of economic thought, were entitled "The Role of Providence in the Social Order: An Essay in Intellectual History" (1972), and "Religious Thought and Economic Society: Four chapters of an unfinished work by Jacob Viner" (1978). Weber's thesis on the ascetic ethics of Protestantism, which has strongly influenced the economic development of modern capitalism, is adopted and accepted by numerous scholars with qualifications and reservations of varying degrees of significance. Viner stated that although "social history" deviates from the scope of his research, he attempted to break new ground in the research area of economic thought on capitalism and Christianity. Meanwhile, he partially supported Weber's thesis using the "ideal type", based on the following aspects. First, Max Weber had numerous predecessors who drew close historical associations between Protestantism and the rise of capitalism. Second, Weber's originality lies in his excellent "explanation" of the association between capitalism's spirit and Protestantism. Third, Viner, unlike Weber's thesis, argued that Christianity had successfully adjusted to the development of capitalism. This study aims to clarify the economic thought of Viner, who discussed the relationship between religion and economy. In doing so, it investigates his views on (i) the role of providence in the social order, (ii) international trade and providence, (iii) invisible hand and providence, (iv) social inequality and providence, and (v) Weber's thesis.

JEL classification Number: B22, B30